

『いのちの世話』をする市民社会の構築

2020年08月07日

作家の五木寛之氏は、十年前くらい前から諸々の著作で「下山の思想」を展開していた。戦後の窮乏から経済は回復し、徐々に「一億総中流」と言われるほどになり、国民総生産（GDP）は世界の二位までに成長した。しかし、その成長にも陰りが現れ、現在、豊かだと思っている人は、ほんの少数であろう。平均給料の国別ランキングは18位で、何より貧富の格差が広がっている。非正規労働者は二千万人を超し、労働者の38%を占め、年収200万円以下の労働者も一千万人を超し、11.2%にもなる。少子化と言われるが、家庭を持たない状況ではないか。もはや、右肩上がりの成長などは望めない。五木氏は、今や山を下る時だと言ひ、その下り道にも、周りをみれば楽しいこともあると説いている。分かち合い、互いの生をどう支えるかを模索する「下山の思想」の時であると実感する。

新型コロナ禍を経験し、日本の社会はいかに脆弱なものであったかを知らされた。その脆弱さについて、『週刊金曜日』に掲載された岡野八代氏の「ケアされる人を中心とする新しい政治を求める」という論考に深く共感した。社会は、相互に依存しながら織りなし、それは「ケア」に頼りながら生かされている社会である。ところが、ケアを、いわば社会的弱者と言われる人々に押し付け、二流、三流の仕事と見なして来た。これからは、ケアを中心に据えた政治に変える必要がある。政治や経済を大きく動かす働きをしている人々は、自分たちはケア労働には向いていない、もっと重要な仕事をしていると思っている。岡野氏は、ケア労働を軽視、蔑むことを「特権的な無責任」と言ひ、こうした特権を終わらせることから民主政治は始まる、「エッセンシャル・ワーク」と言われる人の命を支える仕事が重要視されるべきであると訴えている。

哲学者の鷺田清一氏が『しんがりの思想』を上梓している。新型コロナ前の2015年に出された本であるが、岡野氏の論考に重なり、下記のように書いている。「いまあらためて顧みて、ひとびとが生き^{ながら}存えるためにどうしてもしなければならないこと、たとえば出産の助け、食料の調達、排泄物の処理、病や傷の手当て、看護や介護、看取りや清拭や埋葬といったいとなみをひとびとはどれだけじぶんたちの手でできるだろうか。ほぼすべてできないし、したこともないのではないか。生き^{ながら}存えるためにひとがどうしてもしなければならないこと、けっして免除されることのないこと、つまりは『いのちの世話』の能力をわたしたちはほぼすべて失っている。それは地域社会のだれかがやってくれるからではなく、わたしたちが税金やサービス料を払って、これらをことごとく行政サービスやサービス・ビジネスに委託してきたからだ。」鷺田氏は、経済成長に溺れ、「押し付け」と「おまかせ」の安楽を貪り、いのちの世話をし合う市民社会の構築を放棄してきたからだと言う。

鷺田氏の『しんがりの思想』はリーダー論で、「帯」には「強いリーダーなんかいない！いま本当に必要なのは、登山でしんがりを務めるようなフォローアップ精神にあふれた人びとである」と紹介している。本文で、「この国は本気で『退却戦』を考えなければならない時代に入りつつある。そのときリーダーの任に堪えうるのは、もはや《引っ張ってゆく》タイプのリーダーではない。それは『右肩上がり』の時代にしか通用しないリーダー像だ。これに対して、ダウンサイジングの時代に求められるのは、いってみれば『しんがり』のマインドである」と書いている。下山の時、全体を配慮しながら、しんがりを歩くリーダーが求められると言う。主イエスは、支配者は人々の上に君臨し、偉い人は権力を振っているが、偉くなり、頭になりたいと思う者は仕える人、僕になりなさいと諭された。